

まえがき

筆者は小さい時から動物や森に囲まれて育ちました。学校から帰ると荷物を置いて家から飛び出し、野山を駆け巡る生活で、山や川が庭でした。夏になると、おにぎりを持って出かけ、川で魚を捕まえて焼いておかずにするなど、現在の生活とはかけ離れた自然の中で生きてきました。そのため、自分を含め人間が自然の一部であり、生命体としてつながっていることは、無意識にも身に染みて理解していました。

鳥や魚を捕まえ、時にはウサギを狙うこともありました。そのとき、動物と筆者の知恵比べが始まります。罠を仕掛けるとき、動物が何に気づき、何がわからないのか。動物の行動を観察し、その背景にある心理状態を模索し、あれこれと知恵を出して（ほとんどが浅知恵でしたが）、楽しんでいたのを記憶しています。そのなかで、鳥の集団、魚の集団がきれいな群れを形成し、ある時には採餌し、ある時には警戒行動からまとまった逃避行動を示していたことを覚えています。夏になるとカエルが大合唱し、蛍が幻想的な光を放っていました。

動物にはこのように集団を形成し、その中で調和を保ちつつ、個体でいるよりも有利になるような仕組みが備わっています。1羽の鳥が人の気配に気づくと、「危ないよ」といわんばかりに周囲に情報が伝達され、そして一斉に飛び立ちます。このような集団の行動は、集団として機能を果たし、個体の生存率や出生率を上昇させてきたのでしょう。“集団”が有利にはたらくことで、個体が生き残ってきた証だと思います。

動物の集団は、基本的には、オスメスの配偶関係あるいはその子孫で形成されます。時には鳥類や魚類のように血縁関係のない多集団も存在しますが、哺乳類を見る限り、家族的なつながりが集団の中心を担います。おそらくそのな

かで、チャールズ・ダーウィン博士が述べたようなことが起こったのだと思います。「同情（あるいは共感）は習慣（学習）によってより強く発現するようになる。どんなに複雑なかたちにその気持が発展しようが、相互に助け合いそして保護し合うすべての動物にとって、同情に関わる感情は非常に重要なものの一つであり、自然淘汰の進化の過程においてもさらにその重要性は高まってきているといえる。最も思いやりの強いメンバーが数多く含まれている群れは最もよく繁栄して、多くの子孫を育て上げることが可能なのである」（筆者訳）。進化とは、生存競争に勝ったものが残り、競争に破れたものは滅びていくという、いわば適者生存の自然選択がはたらきます。そしてこの自然選択が最も強い選択圧になったことは疑いようがありません。しかし、動物、とくに哺乳類は同時に、群れのメンバーが弱者を守り、仲間の存在によってストレスが軽減するような、親和的な神経・行動システムも発達させてきました。これは、動物の家族、すなわち血縁関係にある個体を守り育てるための力、そしてそれを支える愛情や絆として観察することができます。生存競争のなかでも、いや、厳しい生存競争のなかだったからこそ、お互いを思いやるような行動が獲得されてきたといえるでしょう。

今回の著書では、動物が群れ、動物の社会を形成する仕組みをひも解くことを目指しました。群れの基本形が家族によることから、オスメスの関係性がどのように成り立つのか、そして生まれた仔をどのように擁護するのか、という観点から個体間の関係を見直し、その関係がいかに集団に発展していくか、という点に着目しました。最後に、生物としての“ヒト”の特性にまで言及しました。私たちが人間であると同時に、他の動物と同じように、自然の中で共生の仕組みを作り出してきた生物学的な“ヒト”でもあります。その一部は哺乳類など他の動物と同じ機能を有しており、また一部はヒト特異的でもあります。私たち人間が“ヒト”として存在してきたのも、“集団”を理解することで、その一端が解けるだろうと思います。

最後には、異種間による集団の形成に関しても触れています。異種間の集団として、ヒトとイヌを取り上げました。ホモサピエンスの誕生から 20 万年が経ちましたが、ヒトとイヌは諸説あるものの 3 万 5 千年～ 4 万年前から生活を共にしてきたと考えられています。つまり人類は、その歴史の 1/5 をイヌ

と共に歩いてきたのです。イヌはヒトによって家畜化され、おとなしくて従順なものが残ってきました。一方、イヌの存在はヒトの生活を大きく変化させた可能性があります。ヒトの集落にイヌが存在することで、天敵の攻撃を事前に察知することが可能となります。そのおかげで、ヒトは夜間の安眠を手に入れることができました。また狩猟に出かけても、イヌの手助けがあったからこそ大きな獲物をとることが可能となったでしょう。ヒトはイヌを最良の友としましたが、同時にイヌとの共生がヒトをヒトたらしめたのかもしれない。

動物の世界から発せられる声に耳を傾け、その様子をよくよく観察すれば、おのずと“ヒト”が見えてくるかもしれません。ヒトはヒトだけで現在の姿形を手に入れたわけではなく、長い自然のなかでの進化・共生の歴史を経て、今に至っています。そして他の動物も同じように、進化のなかで生き延びてきた種であり、その存在は適応的な戦略をとってきた証でもあります。是非、本書を片手に、周囲の動物たちの進化や社会のあり方に思いを馳せてもらえれば、と思います。

謝 辞

この本を書くにあたり、多くの方々、とくに集団に関する知見、ヒトの特殊性などをご教授くださいました東京大学の長谷川寿一先生、亀田達也先生に御礼申し上げます。また母仔間、雌雄間の研究を共に進め、議論を深めてくれた麻布大学の茂木一孝先生、ヒトとイヌの進化と共生に関するアイデアをたくさん与えてくださった麻布大学の永澤美保先生に多大なるご支援をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、本巻執筆の機会を与えて下さった編集委員の市川眞澄先生、筆者の何度もの締め切り違反を耐え忍び（多大なるご迷惑をおかけしました）、そして励まし続けてくださった共立出版編集部の中内千尋さん、つたない文章を読み解き、推敲して下さった三輪直美さんに深く感謝致します。